

『笑顔の行方』

西脇市立西脇病院

病院長 岩井 正 秀

急いで解決しなくてはならない問題がいくつもあった。朝から憂鬱な気分に取りつかれ、廊下を歩く足取りも重くなっていた。その時、向こうから歩いてくる人影が、すこしうつむき加減の私の視界に入ってきた。たしか今年から働いている新人のスタッフである。名前は何だったかなと考えながら近づいていると、彼女は急に立ち止まって、明るい笑顔で「おはようございます」と言って、頭を下げた。私は一瞬、虚を突かれたようになったのを気付かれないように、笑いながら「おはようございます」と返したが、きつとぎこちない笑顔になっていたに違いない。

彼女とすれ違って、廊下をさらに進んでいると、足が少し軽くなっている。エレベーターの前まで来て、思い直して反対側に向かい、階段を上ることにした。

『人は幸せだから笑うのではない。笑うから幸せなのだ』これは二十世紀初頭のフランスの哲学者アランの言葉である。日本にも古くから、もっとシンプルに『笑う門には福来たる』という同じような諺がある。困難に直面したとき、あるいは重要な問題を抱え込んだ時に、難しい厳しい顔をするのは普通であるし、簡単なことだ。しかし、そのような時にも周囲に対して笑顔を向けることのできる人は、おそらく強い意志と前向きな心を持った人であり、いつか困難を乗り越える力を得ることができると、これらの言葉は教えている。

病院に働く者にとって、笑顔は非常に重要である。しかし、これはファストフード店でよく見かけたスマイルゼロ円の笑顔や、テーマパークのスタッフの人達の爽やかな、でもどこかステレオタイプの笑顔とは根本的に異なるものだ。なぜなら病院で最も笑顔を向けるべき相手は、患者さんやその家族であり、かれらの多くは常に不安や悩みを抱え込んでいるからだ。そういう人たちにとって、病院のスタッフからの相手を思いやる笑顔は、癒しとなり、さらに時として病に立ち向かう勇気を与えるものとなるだろう。そう考えると、いかなる職種であれ、立場であれ、病院に働く者にとって、笑顔で接することができるというのはとても大切な資質ではないだろうか。

笑顔は伝播する。一人一人の笑顔が院内を伝わり広がり、やがてすべての患者さんの心に届くような、そんな病院であることを願って止まないところである。

階段を上っていると、上からベテランのスタッフが降りてくる。彼女もまた多くの困難な事案を抱えていた。私は彼女の視線をとらえて「おはようございます」と笑いながら声をかけた。彼女は一瞬たじろいだように二三回瞬きをしたあと、「おはようございます」と言って、少しぎこちなく笑ったのだった。